

平成18年8月5日

やましろうきたしんぞういんあと　くるみはいじ
平成18年度　山代郷北新造院跡（来美廃寺）発掘調査

島根県教育庁文化財課

島根県埋蔵文化財調査センター

国史跡山代郷北新造院跡（来美廃寺）は、松江市矢田町に所在する古代寺院跡です。平成11年には、遺跡中央に位置する金堂基壇から三尊像を設置した須弥壇が確認されるなど、古代の地方寺院の実態を示す大きな成果を上げています。

島根県教育委員会では、「古代文化の郷“出雲”整備事業」の一環として八雲立つ風土記の丘地内の史跡整備を進めています。今年度は、今秋より始まる整備工事に先だって、規模等が未確定であった金堂跡東西の基壇（建物の基礎部分）について発掘調査を行っています。

1. 第1基壇の調査　基壇北辺と南東隅の調査を行いました。基壇北辺の調査では礎石4基と礎石が抜き取られた痕跡を確認しました。基壇南東部では基壇裾の角を確認しています。建物は3×3間の正方形で、柱間は2.1 + 2.4 + 2.1 mと考えられます。基壇は一辺約10mの正方形になっています。礎石の配置から塔であった可能性が高まりましたが、心礎（塔の中心に位置する心柱を支える礎石）を確認できませんでした。奈良時代後半～平安時代初め頃に建てられたと考えられ、北新造院跡では最も新しい建物と推定されます。

2. 第3基壇の調査　戦前に削平を受けており、礎石は確認できませんでした。

第3基壇の調査では、風鐸3点と加工された石材15点が出土しています。風鐸は長さ約9～12cmを測る小形のもので、風鐸は平成11年度にも全長約10cmのものが出土しており、計4点になりました。

加工のある石材は土管状のものと、車輪状に見えるものがあり、塔の相輪と考えられます。通常相輪は銅製ですが、大和山村廃寺・紀伊三栖廃寺では石製の相輪が知られています。風鐸は、いずれも小形であることから相輪に付くと考えられ、第3基壇上の建物は塔の可能性が確定的になりました。第3基壇上の建物は奈良時代前半には建てられいたと考えられます。

3. まとめ　奈良時代の地誌『出雲国風土記』には、北新造院について「嚴堂あり」と記されています。一見すると一堂しか無かったかのような印象を与えますが、調査では金堂・塔など諸堂が立ち並んでいたことが徐々に明らかになってきました。特に今回の調査では類例の少ない石製相輪など、塔の構造を考える上でも興味深い資料を提供しました。

北新造院跡は、『出雲国風土記』によって、造立者の個人名が特定できる上、伽藍配置が推定でき、三尊像の設置痕跡や塔相輪の部材など貴重な資料が揃うことから、地方寺院を考える上で極めて重要な遺跡になりました。